

「特別収蔵展 藤枝静男展」好評開催中

浜松文芸館では11月24日(日)まで、特別収蔵展として「藤枝静男展 ～藤枝文学のあしあとを辿る～」を開催しています。

藤枝静男(本名 勝見次郎)は藤枝市に生まれ、八高(現名古屋大学)、千葉医大を経た後、浜松市に定住して執筆活動に取り組み、数多くの名作を生み出しました。医師であり小説家でもあった彼の輝かしい業績は、この浜松の地において成し遂げられたといっても過言ではありません。

亡くなってからちょうど20年めとなる今年、改めて彼の偉業を皆様にご紹介したく、この展示を企画しました。

今回は、「彼の文学を育てた仲間や芸術家との交流」、「浜松とのかかわり」に視点を置いて、アルバムや自筆原稿をはじめ幅広い資料を展示しました。どうぞご覧ください。



【主な展示品】

●藤枝静男の文学

- ・主な著書(初刊本) 『犬の血』 他20点
- ・自筆原稿 凶徒津田三蔵、ヤゴの分際 他23点
- ・受賞の様子(写真パネル)、副賞

●藤枝静男をめぐる人々

- ・近代文学 全巻
- ・交友の様子が分かる写真パネル・アルバム
- ・上司海雲からの書簡
- ・サイン帳(安達章子様所蔵)

●藤枝静男と浜松

- ・作品の舞台として登場する場所の写真パネル
- ・『浜松市民文芸』2集～15集
- ・『浜松百撰』創刊号～No.87

文芸館の四季

今年も文芸館の駐車場にドングリの実が転がる時季となりました。

先日の台風26号の翌日は、落ちていた実がまだ青く、風に無理矢理もぎ取られたような不憫さを感じましたが、今はもうすっかり茶色に変色し、ドングリ自身が自然の摂理を知り、納得して枝を離れてきたように思えます。

それにしても、10月は中旬まで半袖で過ごせたのが、ここ数日は季節のギアが2・3段階も一足飛びに切り替わってしまったような気温の差です。「さわやか」という言葉を口にできた日の何と少なかったことか。このぶんではそう遠くない将来、「さわやか」とか「すずしい」とかいう言葉は死語になってしまうのではないかなどと心配しています。

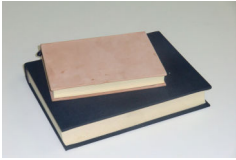
秋の話題でもう一つ。

句会で文芸館を利用される方が「引佐の山に入って採ってきたから」といって、アケビとカラスウリを持ってきてくださいました。

秋の風情を皆様と共有したくて、早速一階のロビーに飾りました。私自身、その前を通るたびに、居ながらにして山の秋を楽しめる贅沢を味わっています。

ちなみに、私は毎日引佐から通勤しているのですが、全く気が付きませんでした。気付きのない生活がいかに人生を貧しくしているか反省させられました。





浜松文学紀行 19

富安風生夫妻上阿多古大富部家に疎開

天竜区二俣には、俳人富安風生の句碑が三基ある。

天竜のへりに椅子おく夕涼み (鳥羽山公園)
残塁に戦国非情梅白し (二俣城址)
この滝にあそべば昔なつかしき (青谷 不動の滝)

「残塁に」の句は、清瀧寺に祀られている徳川家康の嫡男信康の悲劇を詠んだもの。「夫妻父子戦国哀史むら紅葉」の句もある。

大正8年11月、風生は上阿多古村の名家大富部家の末娘敏子と見合い結婚をした。風生35歳、敏子は24歳だった。4か月前、彼は逓信省為替貯金局庶務課長になっていた。昭和11年、官吏最高位の逓信次官に昇任したが、翌年5月に官を辞している。

戦局が厳しくなった昭和20年7月、夫妻は妻の実家である上阿多古村の大富部磐(敏子の兄)宅に疎開した。大富部家の先祖は、戦国時代家康の傘下にあつて大活躍した阿多古鉄砲隊の隊長富部彦左衛門長政で、江戸中期幕府に巨額の金を献上したことから「大富部」を名のるようになったと伝えられている。

風生は翌年3月までの9か月間をのどかで美しいこの山村で過ごした。俳句と温かい村人の情が、厳しい戦時下をとにもかくにも安らかに過ごさせてくれたと句集「村住」(昭和22年刊)のあとがきに記している。「私の履歴書」には次のような記述がある。

山の空高くまれに銀翼を見ることもないではなかったが、まずここなら安全と考えられた。その代わり都会に散らばっている親族の疎開を一手に引き受けた姓の長老たる義兄の家の混雑は、たいへんなものだった。はいはいの孫まで合わせると、二十人以上の人口のはずだった。その中で、わたしは客分としての待遇を受けた。「子供歎老に適ひて草削る」(風生) —— 昼はそんないたずらもしてみるし、夜になると、母屋の一間に大人ばかり集まって「会議」(とちの一枚板の大テーブルを囲んで手製のいもようかんなど食べる団らんの愛称)に加わったりした。そのうちに、会議員をオール・メンバーとする家庭俳句会が生まれでたりした。

風生の句からも上阿多古での生活が偲ばれる。

庭下駄を突かけ仰ぐ鳥の巢
鮎の竿おいて一ぷく岩つつじ
夏山に対ふ机をかくおきて
ちゃんちゃんこ着ても家長の位かな
山家なる妻の在所の柿の秋

後年の句に「留守を守る犬とシャム猫冬うらら」がある。